



TITLE:

朝鮮開港後における華商の對上海
貿易--同順泰資料を通じて

AUTHOR(S):

石川, 亮太

CITATION:

石川, 亮太. 朝鮮開港後における華商の對上海貿易--同順泰資料を通じて. 東洋史研究 2005, 63(4): 846-811

ISSUE DATE:

2005-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/138146>

RIGHT:

朝鮮開港後における華商の對上海貿易

——同順泰資料を通じて——

石 川 亮 太

は じ め に

第1節 同順泰資料の構成と發信者

第2節 上海からの輸入貿易——發送計算書の分析

第3節 上海への輸出貿易——賣上計算書の分析

第4節 同順泰・同泰號間の收支構造

お わ り に

は じ め に

朝鮮は1876年から1880年代にかけ日本や歐米諸國と通商條約を締結してゆくが、その過程で1882年には朝貢關係にあった清國との間でも自由貿易を開始した。對清貿易は1880年代後半から急増し、特に上海からの英國製綿製品の再輸入とそれに對應した金地金の流出とは、やはり綿製品の再輸入が大きな比重を占める對日貿易と競合することになった。このような對清貿易・對日貿易の拮抗状態は、日清戦争後に日本製綿織物の輸入と朝鮮米の輸出とに主導される形で對日貿易が急激に増加するまで續く⁽¹⁾。

さて對清貿易の根據となった朝清商民水陸貿易章程では、清國人の居住地を原則として首都漢城と開港場（仁川・釜山・元山）に限った。日本に較べ内地旅行の要件は緩やかだったが、朝鮮華僑の大半はそれら都市の商業・雜業層によって占められたと考えられる。中でも居留地貿易に従事する華商は上述の對清

(1) 北川修「日清戦争までの日鮮貿易」『歴史科學』創刊號，1932年；彭澤周『明治初期日韓清關係の研究』塙書房，1969年，第3章；村上勝彦「植民地」大石嘉一郎『日本産業革命の研究』下，東京大學出版會，1975年。

貿易の主な擔い手となった。このような華商の活動については、清國の朝鮮に對する政治的影響力の擴大を背景にしたものと解釋されることが多い⁽²⁾。確かに上述の水陸貿易章程自體、通商條約の形態に擬しながら、宗屬關係の存在を前提とした特異な規程であったことは念頭に置かねばなるまい。

とはいえ同時期の東アジアでは全域で開港場華商の活動が活發化していたのであり、朝鮮華商の特徴もそうした廣域的な動向の中で考察すべきであろう。このような視角に立つ研究も既に現れているが⁽³⁾、利用可能な資料が貿易統計や日本領事報告などの集計的・公的記録に偏ってきたために、個別經營のレベルにおける朝鮮華商の特徴はほとんど明らかになっていない。そこで本稿では、ソウル大學校奎章閣に所藏される華商同順泰の經營資料を利用し、その取引關係の廣がりをも具體的に検討したい。

まず華商同順泰について説明しておこう⁽⁴⁾。同商號の經營者は譚傑生という人物で、廣東省肇慶府高要縣に生まれ、朝鮮には1885年頃までに渡航した。首都漢城に同順泰を設立した譚傑生は、1890年代前半には既に在朝廣東人の中心的存在となり、清國當局の意を受けて朝鮮政府に借款を供與する等、巨商として知られていた。日清戰爭以後も朝鮮で活動を續け、1920年代には漢城中華總商會と廣東同鄉會の會長を兼任していたことが知られる。しかし譚傑生は1929

(2) 近代の朝鮮華僑史を概觀した文獻として、高承濟「華僑對韓移民의 社會史的 分析」『白山學報』13號、ソウル：白山學會、1972年；朴銀瓊『한국의 種族性』ソウル：韓國研究院、1986年；楊昭全・孫玉梅『朝鮮華僑史』北京：中國華僑出版公司、1991年；忍谷智雄「在韓華僑の形成過程」『日本植民地研究』9號、1997年；全遇容「한국 근대의 華僑 問題」『韓國史學報』15號、ソウル：高麗史學會、2003年。また19世紀末の華商に關する專論として、譚永盛「朝鮮末期의 清國商人에 關한 研究」檀國大學校碩士論文、1976年；河明生「韓國華僑商業」『研究論集』23號、神奈川大學大學院經濟學研究科、1994年。なお同時期の朝鮮人商人を取り上げる中で華商との對抗關係に言及した研究も少なくない。李炳天「開港期 外國商人의 侵入과 韓國商人의 對應」ソウル大學校博士論文、1985年など。

(3) 濱下武志「朝貢と條約」『朝貢システムと近代アジア』岩波書店、1997年；同「19世紀後半の朝鮮をめぐる華僑の金融ネットワーク」杉山伸也・リンダ＝グロープ編『近代アジアの流通ネットワーク』創文社、1999年；古田和子『上海ネットワークと近代東アジア』東京大學出版會、2000年、特に3～4章。また石川亮太「19世紀末東アジアにおける國際流通構造と朝鮮」『史學雜誌』109編2號、2000年。

(4) 譚傑生の略歴は註2所掲の文獻ほか、朝鮮總督府『朝鮮に於ける支那人』1924年；秦裕光「華僑」『中央日報』ソウル、1979年9月17日號に據った。

年頃死亡し、同順泰も同時に閉店を餘儀なくされたようである。

ソウル大學に所藏されるその資料の中心は、1880年代末から1900年代半ばにかけての文書類である。うち商業書簡の構成については既に検討しており（以下拙稿A）⁽⁵⁾、またその一部を用いて1890年代の取引関係の一端を検討した（以下拙稿B）⁽⁶⁾。それによって同順泰の取引先が中國沿海や日本各地の開港場に及んでいたこと、それら取引先間に多角的な情報の往來が認められること等が明らかとなった。これを受けて本稿では、朝鮮華商の貿易相手先地として最も重要だったとされる上海との貿易に焦點を絞り、それが同順泰の多角的な取引網の中にどのように組み込まれていたかを検討する。資料としては前2稿では取り上げなかった書簡以外の文書類を主として利用し、1880年代後半から日清戦争に至る時期を取り上げる。

第1節 同順泰資料の構成と発信者

(1) 收録文書の構成

ソウル大學校奎章閣所藏の同順泰資料は、同館の整理によれば、『同泰來信』（奎27584、19冊）、『進口各貨艙口單』（奎27581、8冊）、『甲午年各準來貨置本單』（奎27582、2冊）、『乙未來貨置本』（奎27583、1冊）の4種30冊である⁽⁷⁾。これらはいずれも最初から簿冊として成立したものではなく、文書を貼り繼いで折本形態に整理したものである。上記の分類やその基準となった各冊子表題には疑問の餘地もあるが⁽⁸⁾、資料の成立過程についてはひとまず措き、ここでは

(5) 石川亮太「ソウル大學校藏『同泰來信』の性格と成立過程」『九州大學東洋史論集』32號、2004年。

(6) 石川亮太「開港後朝鮮における華商の貿易活動」森時彦編『中國近代化の動態構造』京都大學人文科學研究所、2004年。

(7) 分類表題は『奎章閣圖書韓國本綜合目錄』（修正版、1994年）による。「奎」字以下は奎章閣の請求番號である。なお奎27582表題の「準」字は原資料によれば「埠」字の誤りである。

(8) 拙稿Aでも一部検討したように冊子表題と收録文書の内容・年代が明らかに一致しない場合があり、資料の成立過程については慎重な考察が必要である。またこれらの資料がソウル大學校に所藏されるに至った経緯も不明だが、1928～45年の京城帝國大學時期の收書と推測される（拙稿A註2）。なお本資料については『奎章閣韓國本圖書解題續集』（史部4、1997年）に解題があるが不十分で、また本資料を利用した研究も前掲の拙稿A、B以外には見当たらないようである。

表1 『同泰來信』所收文書内譯（單位：件）

發信者	發信年	己丑 (1889)	甲午 (1894)	癸卯 (1903)	乙巳 (1905)	不明	計
同順泰(仁川)		224	132	135	88	41	620
分號	〃 (全州)		33		7	3	43
	〃 (群山)				38	4	42
	〃 (不明)		3		6	3	12
怡生號(仁川)			9				9
義生盛(〃)			1	1			2
朝鮮 同意樓(〃)					1		1
同豐泰(元山)		1			6	3	10
清國領事館					8	1	9
安和泰(香港)					7		7
清國 同泰號(上海)		1			22	9	32
萬昌和(長崎)					2		2
日本 祥隆號(神戸)					4	6	10
福和號(横濱)			1			4	5
巨昌泰(不明)					1		1
不明 不明		3	14	19	13	10	59
計		229	193	155	203	84	834

出所) 『同泰來信』(奎27584-1~19), 拙稿A(本文註5)附表より。
 註) 受信者は一部例外を除き譚傑生ないし同順泰漢城本號である。

發信年は冊子表題の記載に従い分類した(收録文書各件の發信日が冊子表題と相違する例も一部あるがここでは無視した)。本表の各發信年に對應する冊子をソウル大學請求番號で示せば次の通り(子番號のみ)——己丑: 1~3, 15, 16, 甲午: 4~7, 癸卯: 8~10, 乙巳: 11~14, 19, 不明: 17, 18。ただし15・16の表題には發信年が記されていないが拙稿Aの検討に従い己丑年とした。また17・18の表題にも發信年が記載されておらず, 本表では發信年不明に分類したが, 個々の文書については發信年が判明する場合がある。なお本文中に文書を引用する場合は收録冊子の表題に關わらず各件の發信年を記した。

各冊に收録された文書の構成を概観したい。

まず『同泰來信』19冊には, 同順泰の漢城本號ないし譚傑生に宛てられた書簡が收録されている。その構成は表1の通りである。發信年は1888・1894・1903・1905年に集中している。發信者の8割以上は朝鮮内の同順泰分號で, その他は清國領事館發の書簡9件を除き朝鮮内外の取引先華商からの書簡である。

表2 『進口各貨艙口單』『甲午年各準來貨置本單』『乙未來貨置本』所收文書内譯
(單位: 件)

發信年		戊子 (1888)	辛卯 (1891)	甲午 (1894)	乙未 (1895)	丙申 (1893)	丁酉 (1897)	戊戌 (1898)	己亥 (1899)	庚子 (1900)	癸卯 (1903)	計
朝鮮	同順泰(仁川)			7	53					22	30	112
	同豐泰(元山)						1		1			2
清國	安和泰(香港)		13	3	24	1	1		2			44
	茂和祥(ク)		2									2
	萬祥堂(ク)				2							2
	永安泰(廣州)			2	4							6
	瑞草堂(ク)								2			2
	同泰號(上海)	14	39	27	39	3	18	1	29			170
	老悅坐興記(ク)								1			1
	華彰號(ク)								1			1
	發記(鎮江)			11	26	2	13		12			64
	萬慶源(煙臺)		2									2
	履泰謙(ク)		4									4
日本	萬昌和(長崎)			1	3							4
	祥隆號(神戸)		8	3	6							17
	福和號(横濱)		1	1								2
不明	源春昌			2								2
	陳恒頗號								1			1
	蔡雪喬			1								1
種類別	賣上計算書		59									59
	發送計算書	13	2	35	105				1			156
	その他計算書		8	8	9				1	22	30	78
	包裝明細書	1		15	43	6	33	1	47			143
計		14	69	58	157	6	33	1	49	22	30	439

出所) 『進口各貨艙口單』(奎27581-1~8), 『甲午年各準來貨置本單』(奎27582-1~2), 『乙未來貨置本』(奎27583)。

註) 受信者は一部例外を除き譚傑生ないし同順泰漢城本號である。發信年は文書各件の記載に従っており, 各冊子表題の發信年と食い違う場合がある。

次に『進口各貨艙口單』『甲午年各準來貨置本單』『乙未來貨置本』3種11冊の收録文書は書簡ではなく, 一定の様式で取引内容を通知する文書が中心である。これらの受信者もほぼ全て同順泰本號ないし譚傑生である。11冊の收録文書を一括して整理した表2によれば, 發信年は1888年から1903年までにわたり,

發信者は庚子・癸卯兩年を除いて各地の取引先華商が中心である⁽⁹⁾。また表2では文書種別の内譯も示したが、大別すれば債權債務の發生を通知する計算書と、商品内譯を通知する包裝明細書とに分けられる。計算書はさらに3種に分けられるが、これについては以下で説明を加える。

(2) 發信者について

ここでは收録文書の發信者とその同順泰との關係を検討する。まず同順泰の分號について見よう。同順泰文書のうち『同泰來信』に收録される書簡の大半は朝鮮内の分號から漢城本號に宛てられたものであった。その所在地としては漢城の外港である開港場の仁川と、半島南西部の全州・群山が確認できる。書簡等の内容から推測すれば、これらの分號は經營上本號から獨立しており、海外との取引もそれぞれ別個に行っていたようである⁽¹⁰⁾。

次に取引先華商を見よう。表1・表2では取引先の所在地として、朝鮮の仁川・元山のほか、清國の上海・香港・廣州・煙臺、日本の長崎・大阪・横濱が現れる。このうち同泰號（上海）・安和泰（香港）・萬昌和（長崎）・祥隆號（大阪）・福和號（横濱）については、他の資料から一定の裏づけができる。以下順に検討しよう。

同泰號（上海） 取引先では最も多數の發信文書が見られる。そのうち最も遅い乙巳年（1905）六月二四日附の書簡には「633號」の發信番號が見られる⁽¹¹⁾。己丑年（1889）十二月二三日附の同號書簡には「1號」とあり⁽¹²⁾、「633號」に

(9) ただし戊子年の14件中13件は同泰號發の計算書を基に同順泰で作成した寫しである。表では假に同泰號發として整理した。

(10) 庚寅年（1890）の同泰號發書簡では、「今仁漢は各々門戸を分かった」が今後も協調して行動すべきだと説諭している（梁綸卿發譚傑生宛，庚寅二月四日附，『同泰來信』奎27584-18，R11）。漢城本號と仁川分號は同泰號への買附注文も別途に行っており（梁綸卿發譚傑生宛，庚寅元月十五日附，『同』同，R02），漢城本號勘定の商品を仁川分號が代わって積み降ろす際の諸掛も仁川分號から本號に定期的に請求されていた（『進口各貨艙口單』奎27584-7，-8の所收文書）。なお以下同順泰資料から引用する際はソウル大學校の分類表題と請求番號によって收録冊子を示し，さらに『同泰來信』所收の書簡については拙稿A附表の各件整理番號をあわせて示す。例えば上ではR11とR02がそれに当たる。また日附は漢數字は陰曆を，アラビア數字は陽曆を指すことにする。

(11) 梁綸卿發譚傑生宛，乙巳六月二四日附，『同泰來信』奎27584-19，S33。

(12) 梁綸卿發譚傑生宛，己丑十二月二三日附，『同泰來信』奎27584-18，R01。

至る連番の起點は少なくともそれ以後にあったとすれば、15年以上にわたり年間40通を超える書簡が発信されていたことになる。

同泰號は同順泰の單なる取引先に止まらなかった。例えば己丑年（1889）の仁川分號發本號宛の書簡では、同順泰から同泰號に送附する「年結底帳」の内容に疑義を抱かれぬよう、大規模な取引は豫め同泰號の了解を得ておくべきだと提言している⁽¹³⁾。「年結底帳」については不明だが、同順泰の經營内容が同泰號に定期的に報告されていたものと思われる。同じく仁川分號の書簡では同泰號を「東家」と稱しており⁽¹⁴⁾、資本關係の存在が推測される。とすれば商號名の類似もいわゆる「聯號」關係によると見てよいだろう。

なお同泰號發の書簡には店印のほか「梁綸卿」の署名が見える。受信者名を「傑生内弟」とすることから⁽¹⁵⁾、譚傑生との姻戚關係が推測できる。さらに梁綸卿は上海の廣肇公所で長く董事を務めた人物でもあった⁽¹⁶⁾。譚傑生が朝鮮の廣東出身者の中で臺頭する背景の一つにこうした人物の後ろ盾を考えてもよいだろう。

安和泰（香港） 安和泰發の文書は辛卯年（1891）年から乙巳年（1905）の間に見られ、その件数は取引先としては同泰號に次ぐ。署名は「羅子明」である。1892年の日本領事報告によれば、安和泰は香港の南北行街に店舗を持ち、主に神戸・横濱からの海產物輸入商として活動していたという⁽¹⁷⁾。

萬昌和（長崎） 萬昌和發の文書は甲午年（1894）から乙巳年（1905）まで見られるが、庚寅年（1890）の同泰號發の書簡中にも店名が現れており⁽¹⁸⁾、取引關係の始點はそれ以前に遡ると考えられる。署名は「潘達初」で、この名は長崎の「重建廣東會所碑記」（1915）にも現れる⁽¹⁹⁾。その碑記によれば潘達初の出

(13) 仁川分號發漢城本號宛、己丑四月一日附、『同泰來信』奎27584-16, P15。

(14) 仁川分號發漢城本號宛、己丑二月十五日附、『同泰來信』奎27584-15, O05。

(15) 『同泰來信』奎27584-19所收の梁綸卿發書簡各件。

(16) 『廣肇公所集議簿』（上海市檔案館 Q118-12-139）によれば光緒十七年（1891）～二七年（1901）の董事會にはほぼ缺かさず出席していた。また1918年に至っても公所の最年長董事として在任していた（郭緒印『老上海的同鄉團體』上海：文匯出版社，2003年，447頁）。

(17) 「香港ニ於ケル海產物取引ニ關スル規約並慣例」『通商報告』2830號，1892年。

(18) 梁綸卿發譚傑生宛、庚寅元月二五日、『同泰來信』奎27584-18, R06。

(19) 内田直作『日本華僑社會の研究』同文館，1949年，152頁より引用。

身は廣東省廣州府南海縣であつた。

祥隆號（大阪） 祥隆號發の文書は庚寅年（1890）から乙巳年（1905）まで見られる²⁰⁾。署名は「陳達生」である。この人物は廣東省廣州府順德縣に生まれて1870年ごろ渡日し、海産物貿易や輸出マッチ製造を手がけたほか、神戸の廣東華商が結成した廣業公所の理事も務めた²¹⁾。

福和號（横濱） 福和號發の文書は庚寅年（1890）から甲午年（1894）まで見られる²²⁾。署名は「譚玉階」である。この店名・人名は1899年の記録に横濱の「重もなる清商人」の一として現れている²³⁾。出身地は不詳だが、明治初期の横濱華僑の大半は廣州・肇慶兩府の出身だったとされ²⁴⁾、譚玉階もその一人だった可能性が高い。また文書受信者を「傑生宗兄大人」としていることから²⁵⁾、譚傑生との親族関係の存在も考えられよう。

以上のように確認できる同順泰の取引先は多くないが、同泰號・安和泰・祥隆號・萬昌和については現存の同順泰資料がカバーする期間ほぼ全てにわたり取引関係が繼續していた。またいずれも譚傑生と同じ廣東省の珠江下流域出身であった可能性が高く、一部の取引先との間には親族・姻族関係も存在した。つまり同順泰の取引関係は、譚傑生個人の地縁・血縁関係が及ぶ範囲内で、特定の商號と繼續的に結び結ばれる傾向が強かったといえる。

20) 庚寅年發の文書は『同泰來信』奎27584-18所收の二月三日附 R09、二月二日附 R10、二月十一日附 R13の3件。表1では發信年「不明」に含まれる（理由は表註参照）。

21) 中華會館『落地生根—神戸華僑と神阪中華會館の百年』研文出版、2000年、66頁；籠谷直人「1880年代のアジアから“衝擊”と日本の對應」『歴史學研究』608號、1990年、6頁。なお祥隆號は大阪・神戸の雙方に店舗を有したようだが（上掲籠谷論文表5）、本稿では大阪で記述を統一した。現存の祥隆號發文書では「阪莊祥隆號」「神戸祥隆號」「神戸海岸六十五番祥隆號」の3種の印影が見られる（拙稿A附表参照）。

22) 庚寅年發の文書は『同泰來信』奎27584-18所收の一月二日附 R07。

23) 「當港在留清商氏名」『横濱商業會議所月報』28號、1899年。

24) 白井勝美「横濱居留地の中國人」『横濱市史』3卷下、1963年、864頁。

25) 譚玉階發譚傑生宛、癸巳十二月十九日附、『同泰來信』奎27584-4、D02。

第2節 上海からの輸入貿易——發送計算書の分析

(1) 發送計算書について

表2で「發送計算書」に分類したのは、取引先が同順泰に商品を發送する際に作成したと考えられる文書である。本節ではそのうち同泰號（上海）の作成した發送計算書を用いて、同順泰の上海からの輸入貿易について検討する。まず發送計算書そのものの書式構成について、**史料1**（同泰號發同順泰宛，甲午十二月二八日附）を例に説明しよう。①冒頭行に對象荷便の情報が記載される。史料1では出荷番號「拾陸〔16〕幫」，利用船名「法公司沙麥南火船」，經由地「崎〔長崎〕」が記載されている。②第2行目以下で荷便の構成商品が列記される。史料1では、商品は「紗綾」1箱（HCTは包装の荷印），そこに「天青芝素紗」「花徐綾」の2種類が含まれ、それぞれ數量と單價，合計代金が記されている。③「支〜」として發送に要した諸掛が列記される。史料1では輸出税，梱包費用，海上保険料，手数料，海上運賃の諸項目が計上されている。④「共計〜」等として合計金額が示される。⑤最終行に受發信者と發信日等が記され

史料1 發送計算書例

拾陸幫 由法公司沙麥南火船付崎轉上 乙元月十五日乃到撥入乙年册				
HCT 紗綾 壹箱 計開				
	天青芝素紗	計24疋	5.3兩	127.2兩
	花徐綾	又116疋	2.25兩	261兩
	支 稅紗85斤	12	1118	11.404兩
	支 木箱1寸／捆纂	12		1.12兩
	支 安泰保漬	500兩	1寸 5折	2.5兩
	支 叨行佣	1寸		3.88兩
	支 水脚	洋1.5元	75	1.125兩
覆〔過〕	共計銀四百另八兩貳錢二九			[同泰圖章]
同順泰寶號	台照	甲臘月廿八日	[甲午]	[上海北頭同泰號] 結單

出所) 『甲午年各準來貨置本單』(奎27582-1)，表3のa19文書。

註) 原資料は縦書き。スラッシュ(／)は原資料上に改行があることを示す。
 字配りは基本的に原資料に従うが位置関係を正確に再現したものではない。
 四角括弧〔 〕は印影。なお〔同泰圖章〕印は原資料では額面上に押印。
 アラビア數字は原資料上では蘇州碼字。斜體字は別筆と考えられる箇所。

る²⁶⁾。このような文書の構成は、同泰號以外の取引先が発信したものであっても、基本的に共通している。

取引先の商號は、このような發送計算書を荷便發送ごとに作成し、④に示された金額を同順泰に請求したと考えられる²⁷⁾。多くの場合④は商品代金(②)と諸掛(③)の合計で、この場合発信者は商品の輸出者自身と見てよい。しかし一部の文書では②に商品名・数量のみを記して単價・代金を記さず、請求金額(④)も諸掛(③)の合計だけを反映している。この場合発信者は輸出者自身とは考えにくい。一例として乙未(1895)四月二日附の同泰號發計算書では、冒頭行に「第捌幫 代安和泰 由三菱阿夫更火船付崎轉上」とあり、同泰號が香港の安和泰に代わって發送した荷便だと分かる。つまり②に金額に関する記載を缺くような發送計算書は、第三の商號が輸出した商品の中繼港で積替えた際の諸掛だけを請求していると考えられる。このように發送計算書には、発信者自身の輸出に関するものと他商號輸出品の轉送に関するものとの二種類があった點が注意される。

表3は、甲午(1894)・乙未(1895)兩年の發送計算書中、同順泰分號の発信分を除いた91件を整理したものである。うち41件が上海の同泰號發で、他に安和泰(香港)、永安泰(廣州)、福和號(橫濱)、祥隆號(大阪)、宏昌號(長崎)、萬昌和(長崎)が発信者として現れる。また商品代金の記載がない、轉送に關する發送計算書は91件中13件である。これら13件のうち7件については、對應する輸出者自身の發送計算書も併せて残っている(備考欄)。

26) 末尾の文言「結單」は同泰號發の發送計算書と後述する賣上計算書にほぼ共通して見られる。同泰號で計算書一般を指した語であろう。ただしこの箇所の文言は發送者によって異なり、例えば安和泰の場合は發送計算書は「置本單」、賣上計算書は「代辦單」として區別している。このような文書體系の問題については後稿を期したい。

27) 發送計算書の構成項目は現在の商業送り狀に近い。また發送計算書は、同じく荷便ごとに作成された包裝明細書・船荷證券(「提單」)と共に船積文書として同順泰に發送されたようであり(梁綸卿發譚傑生宛、庚寅二月四日附、『同泰來信』奎27584-18, R11)、こうした文書の經路も現在の商業送り狀と類似している。開港場貿易の成長に伴って歐米的な商慣習が華商に受容された結果と推測できる。ただし後述の如く發送計算書は、中繼港での積替に際しても同様の書式で作成されており、當事者の文書體系の中でどう位置づけられていたかは、現在の商業送り狀とは一應區別して考えなければならない。

表3 發送計算書一覽（甲午・乙未(1894～95)年）

番號	發信者	發信日	商品代金	諸掛	單位	出荷番號	經由地	備考
a01	同泰號(上海)	甲午01.12	3641.9	85.6	兩	元幫		
a02	〃	甲午02.02	1896.9	249.3	〃	第貳幫		
a03	〃	甲午02.20	148.6	7.1	〃	第參水		
a04	〃	甲午02.20		20.0	〃			轉送(?)
a05	〃	甲午02.23	1287.8	70.7	〃	第四幫		
a06	〃	甲午03.09	1428.6	65.2	〃	第五幫		
a07	〃	甲午03.18	258.0	11.9	〃	六幫		
a08	〃	甲午03.23	475.1	24.4	〃	第七幫		
a09	〃	甲午04.11	678.9	31.6	〃	第八幫		
a10	〃	甲午04.26	658.3	29.2	〃	第九幫		
a11	〃	甲午05.09	603.7	21.0	〃	第拾幫		
a12	〃	甲午05.09	4108.4	31.0	〃			現銀輸送
a13	〃	甲午09.22	710.4	29.1	〃	拾壹幫	神戸	
a14	〃	甲午10.24	12422.9	636.8	〃	拾貳幫	長崎	
a15	〃	甲午11.10	4093.7	188.5	〃	拾參幫	長崎	
a16	〃	甲午11	3296.3	125.6	〃	拾四水	長崎	
a17	〃	甲午12.24	14620.0	752.7	〃	拾五幫	長崎	
a18	〃	甲午12.24	212.8	6.1	〃		長崎	「澆沽」とあり
a19	〃	甲午12.28	388.2	20.0	〃	拾陸幫	長崎	
a20	〃 乙未01.09	2474.1	100.4	〃	元幫	■■■	
a21	〃	乙未01.17	1685.1	88.6	〃	貳幫	長崎	
a22	〃	乙未01.31	2353.9	141.7	〃	參幫	長崎	
a23	〃	乙未02.17	6655.2	323.5	〃	第四幫	長崎	
a24	〃	乙未03.01	14825.1	918.0	〃	第五幫		
a25	〃	乙未03.22	30365.9	1761.5	〃	第陸幫		
a26	〃	乙未04.02		9.4	〃	第捌幫	長崎	轉送(b08)
a27	〃	乙未04.12	7325.9	490.1	〃	第九幫		
a28	〃	乙未05.01	4113.8	177.1	〃	第拾幫		
a29	〃	乙未05.25	7675.0	466.3	〃	第拾壹幫		
a30	〃	乙未05(閏).17	10895.6	452.9	〃	拾貳幫		
a31	〃	乙未06.10		4.7	〃			轉送(「代友」?)
a32	〃	乙未06.10	9959.0	549.5	〃	拾參幫		
a33	〃	乙未07.20	12179.7	599.0	〃	拾四幫		
a34	〃	乙未07.29	9827.3	368.6	〃	拾五幫		
a35	〃	乙未08.17	10328.8	419.1	〃	拾六幫		
a36	〃	乙未09.10	3930.4	176.5	〃	拾七幫		
a37	〃	乙未09.30	3107.0	189.8	〃	拾八幫		
a38	〃	乙未10.20	4847.1	286.2	〃	拾九幫		

a39	〃	乙未11.10	932.6	32.6	〃	念幫		
a40	〃	乙未11.29	1140.3	106.6	〃	念壹幫		
a41	〃	乙未12.27	1968.9	150.2	〃	念貳幫		
b01	安和泰(香港)	甲午02.13	761.1	28.4	元	首幫	上海	
b02	〃	甲午02.27	902.8	37.2	〃	貳幫	上海	
b03	〃	甲午04.03	109.7	3.2	〃	參幫	上海	
b04	〃	乙未02.13	566.8	30.2	〃	漢城元幫	上海	
b05	〃	乙未03.11	607.3	45.4	〃	漢城第貳幫	上海	
b06	〃	乙未03.17	42.0	0.6	〃	第三幫	上海	
b07	〃	乙未03.17		16.2	〃		上海	轉送(積戻し?)
b08	〃	乙未03.22	245.8	14.5	〃	第四幫	上海	
b09	〃	乙未03.28	640.3	40.0	〃	漢城第五幫	上海	
b10	〃	乙未03.29	282.8	16.5	〃	漢城續五幫	上海	
b11	〃	乙未04.20	575.9	41.1	〃	漢城第六幫	上海	
b12	〃	乙未05.06	424.7	20.0	〃	第七幫	神戸	
b13	〃	乙未05.22		12.0	〃		神戸	轉送(c04・e06)
b14	〃	乙未05(閏).09	569.5	43.8	〃	第八幫		
b15	〃	乙未05(閏).12	188.8	18.8	兩	漢城第九幫	長崎	
b16	〃	乙未05(閏).22	36.6	12.1	〃	第拾幫	神戸	
b17	〃	乙未06.01	687.5	74.1	〃	第拾壹幫	仁川	
b18	〃	乙未06.16	574.2	27.1	〃	第拾貳幫	上海	
b19	〃	乙未06.18	494.7	24.9	〃	第拾參幫	上海	
b20	〃	乙未07.20	75.0	5.2	〃	第拾四幫	仁川	
b21	〃	乙未09.04	238.5	4.7	〃	第拾五幫	仁川	
b22	〃	乙未09.22	263.0	4.1	元	第拾五幫	仁川	
c01	永安泰(廣州)	甲午02.14	135.3	38.4	兩	漢首幫	上海	
c02	〃	甲午02.14	135.3	33.1	〃	漢首幫	上海	c01の訂正
c03	〃	乙未03.05	175.9	37.0	〃	漢城首幫	上海	
c04	〃	乙未05.16	203.0	12.0	〃		香港・神戸	
d01	福和號(横濱)	乙未06.24	505.6	82.1	元	首幫		
e01	祥隆號(大阪)	甲午01.02	105.0	11.1	元	首幫		
e02	〃	甲午04.19	66.4	7.4	〃	首幫		
e03	〃	甲午05.02	207.0	58.9	〃	貳幫		
e04	〃	乙未02.10	73.3	16.6	〃			
e05	〃	乙未03.29	72.4	16.3	〃	漢城第貳幫		
e06	〃	乙未05(閏).04		6.3	〃			轉送(c04・b13)
e07	〃	乙未05.17		3.6	〃			轉送(b12)
e08	〃	乙未06.06		4.6	〃			轉送(b16)

e09	〃	乙未07.02		98.9	〃		轉送(?)
f01	宏昌號(長崎)	乙未05(閏).24		3.2	元		轉送(b15)
g01	萬昌和(長崎)	甲午11.14		55.3	元		轉送(?)
g02	〃	乙未01.15		6.1	〃	上海	轉送(?)
g03	〃	乙未01.29		1.5	〃		轉送(a21)

出所) 『甲午年各準來貨置本單』(奎27581-1~2)

註1) 出所冊子の收録文書中、表2で發送計算書に分類した文書を發信者ごと冊子への收録順に配列(ただし仁川同順泰發の文書を除く)。受信者はすべて同順泰本號。發信日は原資料に従ったが干支等が省略されている場合は適宜補った。金額は小數點以下第2位を四捨五入。空欄は該當項目の記載がないことを示す。■は不明字。

註2) 發送計算書のうち他商號貨物の轉送に関するものは、備考欄に「轉送」とし、カッコ内に對應する(本來の出荷者が作成した)發送計算書の番號を示した。對應する發送計算書の見当たらない場合は(?)としたが、そのうちe09は同順泰發・安和泰宛、g01は同順泰發・安和泰同泰號宛、g02は同泰號發・宛先不明の荷便を轉送する際に作成されたことが當該文書の記載から判明する。

(2) 發送頻度と商品構成

ここでは同泰號發の發送計算書から、發送の頻度と商品構成を検討する。まず文書冒頭に記される出荷番號に注目しよう。同泰號の發送計算書41件のうち37件に出荷番號の記載が見られる。番號は曆年周期で「元幫」から順に附され、甲午年は十二月二八日附の「拾陸〔16〕幫」まで、乙未年は十二月二七日附の「念貳〔22〕幫」まで至っている。この番號は安和泰輸出品の轉送に関するa26にも附されており、自號輸出品か他號輸出品の轉送かに関わらず、同泰號からの發送には一元的に出荷番號が割り振られたものと推測される。

なお41件のうち4件(a04, a12, a18, a31)には出荷番號が附されていない。發信日附を確認すると、それぞれ同日の發送計算書が別に存在し、それらには出荷番號が附されている。同日附の發送計算書を對照すると取引條件の上で相違があったことが分かる²⁸⁾。つまり出荷番號の附されない4件に記載された商品も、實質的には同日の出荷番號を持つ荷便の一部として發送されたものであり、ただ取引條件に相違があったために發送計算書が別に立てられたものと見

²⁸⁾ 出荷番號の記載がない4件は、他商號輸出品の轉送(a02, a31)、銀の輸送(a12)、同泰號からの販賣委託(a18)である。對して同日附の出荷番號が附された發送計算書は、いずれも同泰號が手数料を取得して行う受託買附の商品を対象としている。本節(3)参照。

てよいだろう。

このように一回の荷便には基本的に一つの出荷番號が當てられ、それが一元的に連續していたとすれば、これによって發送の頻度が推測できる。先述のように甲午・乙未年の場合、各年十二月末の時點で第16便、第22便まで發送されていた。また表2に掲げたように戊子年の發送計算書も一部が残り、また戊子年から己亥年までは同じく荷便ごとに作成された包裝明細書の一部が残っている。これらから各年で最も遅い荷便の出荷番號を抽出すれば、戊子（1888）十一月十日第16便、丙申（1896）十二月二一日第7便、丁酉（1897）八月二七日第21便、戊戌（1898）十二月二九日第26便、己亥（1899）十二月二三日第29便となる。甲午・乙未年の分も含め、一年に20便前後から多くて30便程度の發送があったといえる。

次に甲午・乙未年の輸出商品内譯を検討しよう。兩年の發送計算書は乙未年第7便を除いて出荷番號に缺落がないから、概要を窺うには足りる。表4は同泰號發の發送計算書41件のうち、轉送に關する3件を除く38件に記載された輸出商品を分類整理したものである。單位「兩」は上海規銀と考えられる。これによれば甲午年に52千兩、乙未年に148千兩の輸出が確認できる（諸掛を除く）。甲午年の輸出額が少ないのは日清戰爭のためと考えられるが、商品構成自体は乙未年と類似する。兩年とも最大の輸出品は絹織物で、輸出總額のそれぞれ58%と48%を占めるほか、綿織物・麻織物・藥材などの消費財が輸出品の中心となっている⁽²⁹⁾。うち綿織物（原資料上では「市布」など）は輸入綿織物の再輸出である可能性が高いが、それ以外は概ね清國產の在來商品と考えられる。

なお表4では、参考のため他商號の輸出商品についても整理した。これらの數字が實際の發送のうちどれほどを補足しているかは検討の必要があり、また金額單位も同泰號のそれと比較できるか明かかではない。しかし現存する發送計算書から見た限りでは同泰號の輸出額には及ばず、また商品構成では在來商品とくに藥材の比重が高いことが分かる。

(29) 参考までに戊子年（1888）の同泰號發送計算書13件（註9參照）から把握できる限りの輸出品構成を見ると、輸出額38,499兩のうち絹織物が18,943兩（49%）、綿織物が14,705兩（38%）、麻織物が1,627兩（4%）を占め、やはり甲午・乙未年と同様の傾向を示す。

表4 各取引先から同順泰への輸出高(甲午・乙未年)

輸出者	品目(単位)	金額	
		甲午年	乙未年
同泰號(上海)	絹織物 (兩)	29,892.1	70,340.0
	綿織物 (々)	6,163.9	41,407.2
	麻織物 (々)	220.0	19,464.7
	銀地金 (々)	6,026.5	
	食品・藥材(々)	5,611.6	7,409.6
	雜貨 (々)	3,160.9	6,937.9
	その他 (々)	880.7	1,974.9
	合計 (々)	51,955.7	147,534.3
安和泰(香港)	絹織物 (兩)		188.8
	食品・藥材(元)	947.4	920.9
	々 (兩)		287.8
	雜貨 (元)	64.8	3,546.4
	その他 (々)	771.4	1,609.6
	合計 (々)	1,783.6	6,076.9
永安泰(廣州)	(兩)		476.6
	藥材 (兩)	135.2	318.4
	その他 (々)		60.5
	合計 (々)	135.2	378.9
祥隆號(大阪)	藥材 (元)	66.4	145.7
	雜貨 (々)	105.0	
	その他 (々)	207.0	
	合計 (々)	378.4	145.7
福和號(横濱)	食品 (元)		505.6

出所) 表3に同じ。ただし轉送に関する文書を除く(表3註2)。

註) 品目は原資料上の商品名をもとに筆者が分類した。空欄は當該品目の輸出がないことを意味する。安和泰發の文書では金額が兩建の場合と元建の場合とがあるため併記したが、兩方の換算額が示されている場合には兩建の金額を採用した。

(3) 取引条件について

ここでは同泰號による發送計算書の諸掛項目や注記等を通じて取引条件をより詳細に検討する。以下では自號の輸出に關する文書と轉送に關する文書とに分けて検討する。

①**自號の輸出について** 同泰號自身の輸出に關する發送計算書は38件である。それらに諸掛費用として計上されている項目は、輸出税（「税」）、荷役費用（「出棧」「下力」「駁艇」等）、包裝費用（「箱」「捆纂」等）、海上保険料（「安泰保漬」等）、海上運賃（「水脚」「載脚」等）、手数料（「叨光行佣」「叨佣」「叨行佣」など）の6種類に分類できる。うち荷役費用・海上運賃・海上保険料の3種類はいずれの計算書にも計上されており、輸出が基本的に運賃・保険料込み渡し（C. I. F.）の条件で行われたことが分かる。

この3種類以外には手数料の項目が38件中36件に計上されている。その額はいずれも商品代金の1%に当たる。これを同泰號自身の取得する手数料とすれば、これらの輸出は同順泰からの委託に基づく買付けとして行われた可能性が高い。同時期の書簡からも、同泰號がしばしば受託商品の買付け状況を同順泰に連絡したり、逆に上海市況を提示して買付けの要否を尋ねたりしていたことが分かる³⁰⁾。出荷番號の連続性を考慮すれば、同泰號の同順泰への輸出は基本的に同順泰からの委託に基づく買付けとして行われていたといつてよいだろう。絹織物をはじめ規格化が困難な在來商品が輸出商品の中心を占めていたことを考えれば、取引条件が受託買付けに偏っていたことは不思議ではない³¹⁾。

一方で手数料が諸掛に含まれないのは2件で、うちa12は一般商品の輸出で

30) 梁綸卿發譚傑生宛，己丑十二月二三日附，『同泰來信』奎27584-18，R01；梁綸卿發譚傑生宛，庚寅元月十五日附，『同』同，R02。

31) なお同泰號が絹織物を買付ける際は、特定の絹織物専門商に包装まで含めて依存していたようである。絹織物の發送計算書には、絹織物商の作成する包装明細書が添附されている場合があるが（表2「包装明細書」のうち64件，甲午年から己亥年まで），その作成者は2例を除き同一であった（店印「鎮江發記字號綢緞抄莊」）。同じことは書簡の記述からも確認できる（仁川分號發漢城本號宛，己丑六月二三日附，『同泰來信』奎27584-3，C58）。商品ごとに固定的な買付け経路が構築されていたものと考えられる。

はなく銀地金現送に係る計算書であり³²⁾、a18には「浼沽」すなわち同泰號側から販賣を委託する旨の注記がある。同泰號側の見込みに基づく輸出が少なかったことがこの点からも推測できる。

②他商號輸出品の轉送について 發送計算書のうち3件は他商號輸出品の轉送に關するものである。うち2件(a04, a26)は香港・安和泰の輸出、1件(a31)は「代友」とあり個人的な關係者による輸出と考えられる。表3にはa26に對應する安和泰の發送計算書としてb08が見えるが、安和泰の發送計算書からは上海經由の荷便が他にもあったことが窺われる。

これら轉送に關する發送計算書では、上海で要した諸係(荷役費用・海上保險料・輸出税など)のみが請求されている。a26とb08を對照すると、海上保險料と運賃は香港・上海の雙方で支出されている。保險會社や船會社側の技術的事情によって區間ごとの支拂いを餘儀なくされていたとすれば、近代的貿易サービスの未成熟を華商の取引關係が補完することで香港・朝鮮間の遠隔地貿易が可能にされていたといえる。

なお同泰號自身の輸出においても途中で積替えを要した場合がある。上海・仁川間には1888年に定期航路が開設され³³⁾、基本的にこの航路が利用されたと考えられるが、運航周期と商品發送のタイミングが合わない場合は長崎の萬昌和經由で發送された例がある³⁴⁾。また日清戰爭により上海・仁川航路が途絶していた間にも日本經由で輸出が行われた。表3によれば甲午年の同泰號からの輸出は、開戦(7月25日/六月二三日)前の五月九日(「第拾幫」)から暫く途絶えたが、九月には神戸經由で輸出が再開され(「拾壹幫」)、翌年春の休戦まで長崎經由の輸出が續く³⁵⁾。こうした迂回輸出の積替えにあたったのも祥隆號・萬昌

32) なおa01では諸掛に手数料を計上しているが、輸出品中に銀地金を含み、その価格は手数料算定の基準(商品代金の1%)にやはり含まれていない。

33) 1888年に清國の輪船招商局が仁川と上海を結ぶ定期航路を開設し、翌89年には日本郵船も同區間の航路に參入した。これ以前にも航路開設の企圖はあったが短期で挫折した。

34) 梁綸卿發譚傑生宛、庚寅一月二五日附、『同泰來信』奎27584-18, R06。

35) 日本政府は戰時中も在日華商の對清貿易に原則として介入しなかった(有賀長雄『日清戰役國際法論』1896年、42-46頁)。また日本・仁川間の定期航路も開戦直後の一時期を除き維持された(「二十七年中仁川港商況年報」『通商彙纂』16號、1895年、67頁)。

和などの取引先華商であった。また日清戦争中は朝鮮・上海間の電信も大阪の祥隆號によって中繼されていた³⁶⁾。清國の政治的勢力が朝鮮半島から後退した開戦後も、同順泰では多角的な取引関係を通じて對上海貿易を繼續していたことが注目される。

第3節 上海への輸出貿易——賣上計算書の分析

(1) 賣上計算書について

本節では表2で「賣上計算書」に分類した文書を用いて同順泰の輸出貿易を検討する。まず賣上計算書の構成を**史料2**（同泰號發同順泰宛，辛卯二月十日發）から確認しよう。①冒頭行に「代售」の文言があり，同順泰からの委託商品の賣却に關する文書であることが推測される。そしてその商品が庚年（庚寅年，1890年）某月一日に出荷番號「十六幫」として到着していたことも分かる。②2行目以下で具體的な品目と代金が示される。史料2では「牛黃」一品目で，重量と單價，合計金額が記されている。③「支～」として賣却に要した諸掛が記される。例では手数料（「叻用」）として商品代金の1%にあたる額が計上されている。同泰號自身が取得する賣却手数料と見てよいだろう。④「除支即找～」以下の金額は商品代金（②）から諸掛（③）を差し引いたものである。⑤最終行に受發信者と日附等が記される。

史料2 賣上計算書例

代售	又十六幫	庚■■■	初一來		
牛黃	淨2.26兩	47兩	106.22兩		
	支叻用	1寸	1.062兩		
除支即找	98元壹百〇五兩錢六分	[同泰圖章]	2月20		
尙存虎皮一只沽出再結	過貨幫・過來往				
漢城同順泰寶號台照	二月初十日 [辛卯]	[上海北頭同泰號]	結單		

出所) 『進口各貨艙口單』(奎27581-1)，表5のi01文書。

註) 史料1に同じ。ただし■■■は不明字。

36) 同泰號發同順泰宛，乙未閏五月二六日附，『甲午年各準來貨置本單』奎27582-2。表2では「その他計算書」に含まれる。冒頭行に「茲將大坂祥隆號代轉電費抄列」とあり，以下二月二十四日から五月初四日まで祥隆號經由で取組まれた16件の電信・電信爲が列記されている。

表5 賣上計算書一覽(辛卯(1891)年)

番號	發信者	發信日	商品代金	諸掛	單位	出荷番號	經由地	備 考
i01	同泰號	辛卯02.10	106.2	1.1	兩	又十六幫	煙臺 神戸	一部「港沽」, j04に對應 「港沽」, j05に對應
i02	(上海)	辛卯03.01	3,457.1	0.4	〃	二幫		
i03	〃	辛卯03.06	21.9	0.2	〃			
i04	〃	辛卯03.29	77.4	0.8	〃	又二幫		
i05	〃	辛卯03.29	6,764.6	0.8	〃			
i06	〃	辛卯04.30	1,203.6	0.2	〃	四幫		
i07	〃	辛卯07.07	295.0	4.0	〃	四幫		
i08	〃	辛卯05.27	4,568.8	0.5	〃	五幫		
i09	〃	辛卯06.18	6,890.0	2.0	〃	又六幫		
i10	〃	辛卯06.18	5,362.3	0.7	〃	六幫		
i11	〃	辛卯06.18	2,126.4	241.7	〃			
i12	〃	辛卯07.01	686.3	39.8	〃			
i13	〃	辛卯07.01	1,826.3	0.3	〃	七幫		
i14	〃	辛卯07.07	1,151.9	0.2	〃	又九水		
i15	〃	辛卯07.26	321.2	16.0	〃			
i16	〃	辛卯07.07	1,045.3	0.3	〃			
i17	〃	辛卯07.26	1,467.0	0.2	〃	十幫		
i18	〃	〔不詳〕	701.9	58.4	〃		煙臺	「港沽」
i19	〃	辛卯08.18	5,130.9	0.6	〃	十一幫	香港	
i20	〃	辛卯09.20	56.0	0.6	〃	十貳幫		
i21	〃	辛卯09.20	6,373.8	0.8	〃	十貳幫		
i22	〃	辛卯09.22	3,479.8	0.5	〃	十三幫		
i23	〃	辛卯10.11	1,067.5	0.2	〃	14幫		
i24	〃	辛卯11.02	2,016.6	0.3	〃	15幫		
i25	〃	辛卯11.19	3,732.4	0.5	〃	十六幫		
i26	〃	辛卯11.19	214.9	0.1	〃	又十六幫		
i27	〃	辛卯12.08	241.7	0.5	〃	又十七幫		
i28	〃	辛卯12.15	180.7	9.7	〃	又十一幫		
i29	〃	辛卯12.20	100.4	1.0	〃	又十七幫		
i30	〃	辛卯12.20	822.8	25.5	〃			
i31	〃	辛卯12.30	4.1	0.2	〃	又十七幫		
j01	安和泰	辛卯04.01	537.1	1.2	元	貳幫	上海	宛先「同泰大寶號」
j02	(香港)	辛卯04.15	360.0	0.9	兩			
j03	〃	辛卯05.12	502.7	1.1	〃	四幫		
j04	〃	辛卯06.12	35.2	0.2	〃			
j05	〃	辛卯06.21	687.7	1.4	〃			
j06	〃	辛卯07.13	150.0	0.3	〃	第五幫		
j07	〃	辛卯09	284.1	0.7	〃	第六幫		
j08	〃	辛卯10	660.8	1.5	〃	第七幫		
j09	〃	辛卯12	446.9	5.8	元	又九幫		
j10	〃	辛卯12	102.3	2.2	〃	第九幫		
j11	〃	辛卯12.30	241.9	0.8	兩	玖幫		
j12	〃	辛卯12.30	579.3	1.7	〃	第十幫		
j13	〃	辛卯12.30	325.1	1.1	〃	第八幫		

k01	茂和祥	辛卯03.10	409.5	5.3	兩	庚貳幫		
k02	(香港)	辛卯03.20	423.2	6.0	〃			
l01	履泰謙	辛卯02.09	145.0	4.8	兩			
l02	(煙臺)	辛卯02.28	45.8	0.7	〃			
l03	〃	辛卯03.29	349.3	13.8	〃			
m01	萬慶源	辛卯05.05	215.3	10.0	兩			
m02	(煙臺)	辛卯06.09	10.0		〃			
n01	祥隆號	辛卯04.28	451.6	13.1	元	漢城首幫	n01～n08の宛先は全て「同泰寶號」、ただし冒頭行に出荷者として「同順泰」と注記	
n02	(大阪)	辛卯04.28	2,044.7	52.4	〃	漢城第貳幫		
n03	〃	辛卯05.04	2,660.3	68.0	〃	漢城第三幫		
n04	〃	辛卯06.01	930.3	23.5	〃	漢庄第四幫		
n05	〃	辛卯06.18	887.3	19.1	〃	漢城第五幫		
n06	〃	辛卯09.28	542.4	17.0	〃	漢城第六幫		
n07	〃	辛卯10.04	183.6	7.3	〃	漢城第七幫		
n08	〃	辛卯09.28	451.8	13.9	〃	漢城第八幫		

出所) 『進口各貨倉口單』(奎27581-1)。

註) 表2で賣上計算書に分類した文書を發信者ごと冊子への收録順に配列した。受信者はほぼ全て同順泰本號だが、一部異なる例については備考欄に注記した。發信日は原資料の記載に従った。出荷番號欄でアラビア數字の箇所(i23, i24)はもと蘇州碼字。空欄は原資料に該當事項の記載がないことを示す。■は不明字。

これらを要するに賣上計算書は、同順泰から委託を受けて賣却した商品につき、清算豫定額(④)を通知するものといえる。現存の賣上計算書は辛卯年(1891)に集中し、件数は59件である(表5)。そのうち31件が同泰號(上海)發の文書で、以下安和泰(香港)、茂和祥(香港)、履泰謙(煙臺)、萬慶源(煙臺)、祥隆號(大阪)が發信者となっている。

なお史料2(表5-i01)では④⑤の間に「虎皮一只」が販賣未済の旨注記されている。對して三月六日附i03は「虎皮一只」の賣上に關するもので、商品の到着日は「庚十二月一日來」とされている。i01冒頭行が破損しているため確言できないが、いずれも同便で到着した商品に關する賣上計算書と見てよいだろう。つまり賣上計算書は、發送計算書とは違って必ずしも荷便ごとに作成された譯ではなく、在庫商品が賣却される都度作成されたと考えられる。表5の出荷番號欄において、同じ荷便の商品を對象とする賣上計算書が複数見られることも上の推測を裏附けている。

(2) 發送頻度と商品構成

賣上計算書の冒頭行には賣却商品の荷便に関する情報が記載されており、これにより同順泰からの發送状況を間接的に知ることができる。表6は同泰號發の賣上計算書から同順泰からの發送荷便を整理したものである。確認できるのは20便で、うち15便に出荷番號が附されている。この15便には經由地が記されず、朝鮮（仁川）から上海へ直送されたと見られる。出荷番號は庚寅年の「十六幫」から辛卯年の「十七幫」までで、辛卯年の第1・第3・第8便を除けば連続している。これら出荷番號が附された便には經由地が記されず、仁川から

表6 同順泰から同泰號への出荷便構成(辛卯年)

出荷番號	着荷日	船名	經由地	對 應
(庚寅年)十六幫	庚寅12.01			i01,i03
(辛卯年)二 幫	辛卯02.23	廣濟		i02,i04
	辛卯03.20	廣濟		i05
(♫)四 幫	辛卯04.21	廣濟		i06,i07
(♫)五 幫	辛卯05.18			i08
	辛卯05.26		煙臺	i11
	辛卯06.02		神戸	i12
(♫)六 幫	辛卯06.18	日新		i09,i10
(♫)七 幫	辛卯06.24	三菱		i13
(♫)九 水	辛卯07.04			i14,i15,i16
	辛卯07.09		煙臺	i18
(♫)十 幫	辛卯07.24	日新		i17
(♫)十一幫	辛卯08.16	日新		i19,i28
(♫)十二幫	辛卯09.03	日新		i20,i21
(♫)十三幫	辛卯09.20	日新		i22
(♫)十四幫	辛卯10.11			i23
(♫)十五幫	辛卯11.01			i24
(♫)十六幫	辛卯11.17	日新		i25,i26
	辛卯12.04		香港	i31
(♫)十七幫	辛卯12.06	日新		i27,i29,i31

出所) 表5のうち同泰號發の賣上計算書。

註) 各賣上計算書の冒頭行に記載された荷便に関する情報を再構成した。記載事項は文書により異なるが、着荷日が同じ場合には同便とみなした。空欄は原資料に該當事項の記載がないことを示す。對應欄は各荷便に對應する賣上計算書の番號(表5)。

上海に直送されたと考えられる。對して出荷番號が附されていない5便のうち三月二〇日到着分を除く4便はいずれも途中經由地が記載されている。

次に賣上計算書に記載された賣却商品を整理した表7を見よう³⁷⁾。これによれば同泰號での賣却商品の9割以上は金銀地金によって占められていた。それ以外では人參をはじめとする在來藥材の比重が高い。これらの賣上計算書が同順泰からの輸出のうちどれだけを捕捉しているか確認することはできないが、先述のように賣上計算書に附された

表7 同順泰からの委託商品賣上高(辛卯年)

賣却者	品目(單位)	金額
同泰號(上海)	金地金 (兩)	47841.21
	銀地金 (々)	8154.48
	藥材(人參ほか) (々)	4998.54
	その他 (々)	501.72
	合計 (々)	61495.95
安和泰(香港)	藥材(人參) (兩)	2994.783
	々 (元)	983.91
	その他 (々)	102.3
	合計 (兩)	2994.783
		(元) 1086.21
茂和祥(香港)	藥材(人參) (兩)	832.643
履泰謙(煙臺)	穀物(高粱) (兩)	487.76
	その他 (々)	69.62
	合計 (々)	557.38
萬慶源(煙臺)	穀物(高粱) (兩)	215.25
	その他 (々)	10,026
	合計 (々)	225,276
祥隆號(大阪)	穀物(大豆ほか) (元)	8151.87

出所) 表5に同じ。ただし安和泰發j04,j05は同泰號發i11,i12と重複するため除いた(本文第3節參照)。

註) 品目は原資料上の商品名をもとに筆者が分類した。安和泰賣却商品の建値については表4註記參照。

同順泰の出荷番號が概ね連續していたことを考えれば、同順泰からの輸出商品の傾向をかなりの程度反映したものと見てよいだろう。また本表では同泰號以外の取引先による賣上計算書の商品構成も併せて示している。把握できる限り同泰號以外の取引先による賣上高は少額で、金銀地金の賣上げも見られない。香港では在來藥材、日本・煙臺では穀物が主たる賣却商品となっている。

37) 史料2から分かるように同泰號發信の賣上計算書の單位は上海規銀である。その他の商號による賣上計算書も、兩建の金額については上海規銀建と考えられる(註46)。

(3) 取引条件について

賣上計算書はいずれも同順泰からの販賣委託に基づいて作成されたが、諸掛費用の項目などを比較すると、条件は必ずしも一樣でないことが分かる。ここでは同泰號の賣上計算書31件について取引条件を検討する。表6で見た途中經由地の有無を手がかりに、仁川から上海への直送便に關する27件の計算書とそれ以外の4件とを分けて見てゆこう。

前者27件はさらに一般商品の賣上げに關する9件³⁸⁾と、金銀地金の賣上げに關する18件³⁹⁾とに分けられる。一般商品に關する9件には、諸掛費用として輸入税や倉敷料などが計上されているが、いずれにも共通して見えるのは手数料（「叨用」）の項目であり、同泰號自身が取得した販賣手数料を指すと考えられる。しかし金銀地金に關する18件には手数料を含め上のような諸掛費用の項目は見られない。見られるのは、商品が金の場合は「炭工估力」の1項目、銀の場合は「公估錢」「估力」のいずれか1項目である⁴⁰⁾。うち「公估錢」は公估局⁴¹⁾での品位鑑定に要した費用と考えられ、ここから推せば「估力」「炭工估力」も地金の改鑄・鑑定に關する費用と見てよいだろう。賣上手数料の費目が見えないことは、これら金銀地金の輸出が實質的には決済等に伴う資金移動に過ぎなかったことを示唆している。

残りの4件の場合、商品はいずれも人參である。うち神戸・煙臺經由の3件（i11, i12, i18）では賣上代金の一部ないし全部に「港沽」の注記が見える。實際にi11, i12の内容は、安和泰（香港）發の賣上計算書j04, j05と對應する。例えば同泰號のi12は神戸から轉送された「麗參」を對象とし、賣上代金686.283兩から諸掛39.758兩を差し引いた646.525兩が同順泰への清算豫定金額となっている。對して安和泰のj05は同泰號から轉送されたやはり「麗參」を

38) i01, i03, i04, i07, i15, i20, i28, i29, i31の9件。

39) 金に關する15件（i02, i05, i06, i08, i10, i13, i14, i17, i19, i21~i25, i27）と銀に關する3件（i09, i16, i26）。

40) ただしi09には「提錢」という項目も見られるが性格は未詳である。

41) 主要都市に置かれた銀錠の品位鑑定と重量検査を行う機關をいう。宮下忠雄『中國幣制の特殊研究—近代中國銀兩制度の研究』日本學術振興會、1952年、71~75頁。

対象とし、賣上代金687.695兩から諸掛1.412兩を差し引いた686.283兩が清算豫定金額となっている。j05の清算豫定金額と i12の（「港沽」と注記された）賣上代金が一致しており、この商品が同泰號に仲介されて安和泰で賣却されたことが推測される。また i11, i12, i18の3件では、諸掛に煙臺・神戸から上海までの運賃と、上海から香港までの運賃との雙方が計上されている。これらから同泰號は、煙臺・神戸で商品を引き取ってから香港で賣却するまでの過程を同順泰に對して請け負ったものと考えられる。

また香港から轉送された人參に關する i31では、諸掛として販賣手数料と輸入税・荷役費用・倉敷料が計上されている。安和泰（香港）が同順泰から委託された商品を積み戻した事例が別にあり（表3-b07）、この i31も同様の積戻品の處分に係る可能性があるだろう。

ここで改めて注意されるのは、これら4件の賣上計算書には荷便の出荷番號が記されていない點である。同順泰の出荷番號が同泰號のそれと同様の原則で附されたとすれば、荷便の經由地如何に關わらず、同泰號宛の荷便には一元的な出荷番號が附されたと考えられる。つまりこれら4件が出荷番號の列から漏れているのは、これらの対象商品が最初に發送される時點では、同泰號への轉送が想定されていなかったためと推測される。それらの商品は當初は神戸や煙臺・香港で賣却される豫定だったのを、滞貨その他の理由によって同泰號に處分が委ねられたのではないだろうか。とすれば同泰號が上海において廣く海外市場の情報を収集し、同順泰輸出品の賣り先を調整することで、同順泰も相對的に安全に遠隔地取引に従事できたと考えられよう。

第4節 同順泰・同泰號間の收支構造

(1) 收支計算書について

前2節では同順泰・同泰號間の貿易活動を輸出・輸入に分けて見てきたが、本節では兩者間の收支構造を全體的に検討したい。利用するのは辛卯年（1891）の5件の計算書で、一定期間の收支各項目を整理して未清算殘高を通知するものである。5件の發信日と対象期間は次のようである。（ア）辛卯六

月六日附：辛卯年初～同六月五日，（イ）辛卯十月十一日附：辛卯六月五日～同十月十一日，（ウ）辛卯十二月三〇日附：辛卯十月十一日～同十二月末日，（エ）（オ）辛卯十二月三〇日附：辛卯年中の補遺。つまりこの5件で辛卯年全體がカバーされていることになる⁴²。

その書式について上記（ア）の一部を掲げた史料3を例に説明しよう。①冒頭行に庚寅年（1890）末の未清算残高を示す。②2行目以下で年初から六月五日までの取引各項目を「收」「付」両方に分け日附順に列記する。左の「收」方には同順泰に対する債務の発生，右の「付」方には債権の発生を記す。本文書では「收」方に20項目，「付」方に21項目を記載している（史料3ではそれぞれ最初の3項目のみを例示した）。なお各項目末の「對」字印は同順泰での検印であろう。③「收」方・「付」方の合計をそれぞれ記し，その次に六月五日時点での未清算残高を示す。この金額は庚寅年末残高（①）に期内の「收」合計を足し「付」方合計を引いた金額と一致する。④末尾行に受発信者と日附等を示す。

これらの文書は対象とする勘定の範囲を明示していないが，以下見るように狭義の貿易以外にも広範な取引項目を含んでおり，ひとまず両商號間の收支全體を対象とする「收支計算書」と見なして分析することにした。なお5件の

史料3 收支計算書例

接庚年結欠98元16198兩08分									
二月初一收	沽元水二月初三	11378兩6錢4分5	〔對〕	二月初六付	十一號票	838兩8錢		〔對〕	
初十收	沽牛黃二月廿	10105兩1錢3分	〔對〕	元月十一付	元水	9302兩1錢2分5		〔對〕	
三月初一收	沽二水二月卅	3456兩7錢4分8	〔對〕	二月初十付	二水	8558兩7錢9分		〔對〕	
〔中略〕				〔中略〕					
共 41374.23兩				共 64013.48兩					
六月初五止				截除收分欠98元38837兩3錢3			〔同泰圖章〕		
漢城	同順泰寶號	台照	辛六月初六日	〔辛卯〕	〔上海北頭同泰號〕			抄	

出所）『進口各貨倉口單』（奎27581-1）所收，本文第4節(1)の（ア）文書。

註）史料1に同じ。

ただし金額は原資料では漢數字と蘇州碼字が混用されているのを全てアラビア數字に置き換えた。

42) 5件とも同泰號發同順泰宛，『進口各貨倉口單』奎27581-1所收。表2では「その他の計算書」に含まれる。なお（ア）から（オ）が相互に連續することは，各文書の前期末残高が一つ前の文書の當期末残高と一致する點から確認できる。

うち（ウ）末尾の記載から、この形式の文書が当事者間で「往來單」と呼ばれていたことが推測できる。同泰號發の書簡の中にも「往來單」に関する記事は散見される。例えば乙巳（1905）二月十九日附の書簡には「仁號」の「甲年往來數」を送附するとあり、同年三月二日附書簡には「漢號」の「往來賬正單」を送附するとある⁽⁴³⁾。これらから同泰號の收支計算書は少なくとも漢城本號宛のそれと仁川分號宛のそれとに分けて作成されていたことも分かる。これは同順泰の本分號が經營的には獨立していたと見られることに對應する（第1節）。ここで扱う辛卯年の收支計算書は、その受信者名から漢城本號に関する收支を示すものと考えられる。

（2）「收」方項目の検討

表8では5件の收支計算書に記載されている「收」「付」の各項目を一括して整理した。表のA欄は「收」方の、B欄は「付」方の各項目を分類整理したもので、各項目については日附と事項、金額を示している。(2)ではこのうちA欄所掲の「收」方各項目について検討する。

①受託販賣 前述の如く同順泰から同泰號への輸出は委託販賣の形で行われ、その結果は賣上計算書で通知されたと考えられる。收支計算書の「收」方には、同じ辛卯年の賣上計算書と事項・金額の一致する項目が31件あり、同順泰から委託された商品の賣却によって生じた債務を示すものと考えられる。具體的には「沽〔出荷番號〕水」「沽〔商品名〕」の形で内容が示されている。なお表8では【 】内に對應する賣上計算書の番號を示した⁽⁴⁴⁾。

②受託販賣（第三者より受託） 收支計算書には同泰號發の賣上計算書に對應する項目ばかりではなく、同泰號以外の第三者發の賣上計算書と對應する項

(43) 前者はS19、後者はS22（いずれも『同泰來信』奎27584-19所收）。

(44) 辛卯年の出荷番號「元幫」の賣上計算書は現存しないが、收支計算書にはそれに当たると見られる項目があり、①に含めた。なお表8の「收」方①②の各項目では事項欄にも日附が見られるが、これは對應する賣上計算書の精算金額欄に注記されている日附と一致する（史料2にも見える）。ただしこの日附の意味は明らかでない。

表8 辛卯年(1891)收支計算書の内譯

A:「收」方

計 103,877.4兩(100%)

①受託販賣

計 72567.4兩 (70%)

02.01「沽元水二月初二」11378.6兩
 02.10「沽牛黃二月廿」105.2兩【i01】
 03.01「沽二水二月卅」3456.7兩【i02】
 03.06「沽虎皮 三月十三」21.7兩【i03】
 03.29「沽牛黃 四月初八」76.6兩【i04】
 03.29「沽金 三月廿九」6763.8兩【i05】
 04.30「沽四水 四月廿七」1203.4兩【i06】
 05.07「沽四水 五月十日」291.0兩【i07】
 05.27「沽五水 五月廿八」4568.3兩【i08】
 06.17「六水金 六月廿二」5361.4兩【i10】
 06.17「元寶」6888.0兩【i09】
 06.17「沽麗參 七月初十」1884.7兩【i11】
 07.01「沽麗參 六月廿」646.5兩【i12】
 07.01「沽七水 六月卅」1826.0兩【i13】
 07.07「沽九水 元寶 初四」1145.0兩【i16】
 07.07「沽又九水 金 七月初十」1152.1兩【i14】

07.26「沽十水 七月廿七」1466.8兩【i17】
 07.26「沽■麗參 七月卅」305.2兩【i15】
 08.18「又〔人參〕 八月初九」643.4兩【i18】
 08.18「沽11水 八月廿三」5130.3兩【i19】
 09.20「沽12水 九月初九」6373.0兩【i21】
 09.28「沽12水 九月卅」55.4兩【i20】
 09.22「沽13水 九月廿六」3480.3兩【i22】
 10.11「沽14水 十月十五」1067.5兩【i23】
 11.02「沽15水 十一月初七」2016.3兩【i24】
 11.15「沽16水 十一月22」3731.9兩【i25】
 11.19「沽元寶 十一月17」214.8兩【i26】
 12.08「沽17水 十二月12」241.7兩【i27】
 12.15「沽11水 十月13」171.0兩【i28】
 12.30「沽洋參 十二月底」797.2兩【i30】
 12.30「沽又17水 十二月底」99.4兩【i29】
 12.30「沽菓子二己 十二月30」3.9兩【i31】

②受託販賣(第三者より受託)

計 11215.6兩 (11%)

(香港・安和泰)

03.26「安和泰 沽二水」385.8兩【j01】
 04.15「港沽三水 白參」359.2兩【j02】
 05.12「安和泰 沽四水」501.6兩【j03】
 07.13「港沽五水」149.6兩【j06】
 09.07「港沽六水」283.4兩【j07】
 10.18「港沽七水」659.2兩【j08】
 12.20「港沽八水」324.0兩【j13】
 12.13「港沽九水」72.1兩【j10】
 12.13「港沽又九水」317.6兩【j09】
 12.20「港沽九水」241.1兩【j11】
 12.24「港沽十水」577.6兩【j12】

(香港・茂和祥)

03.20「又〔茂和祥〕 沽元水」417.1兩【k02】
 03.10「茂和祥沽庚二水」404.2兩【k01】

(煙臺・履泰謙)

02.09「煙沽庚存高粱」140.2兩【l01】
 02.28「煙沽魚肚元水」45.1兩【l02】
 03.29「煙沽高粱」354.5兩【l03】

(煙臺・萬慶源)

05.01「煙沽高粱205.28兩 45水」214.5兩【m01】
 06.09「萬慶源沽■■■」10.7兩【m02】

(大阪・祥隆號)

04.28「祥隆沽元水 438.53元 72」315.8兩【n01】
 04.28「祥隆沽 1992.25元 貳水 72」1434.4兩【n02】
 05.04「祥隆沽三水 2592.31元 7225」1873.0兩【n03】
 06.01「祥隆沽四水 906.81元 7325」664.2兩【n04】
 06.18「祥隆沽5水 868.21元 7325」636.0兩【n05】
 09.28「坂沽7水 176.28元 7325」129.1兩【n07】
 09.28「坂沽8水 437.84元 7325」320.7兩【n08】
 10.04「坂沽6水 525.34元 7325」384.8兩【n06】

③送金受取 計 18740.8兩 (18%)

(横濱・福和號)	(大阪・祥隆號)
08.04「割濱二千元 7325」1465.0兩	06.02「坂來 10350元 7325」7581.4兩
09.13「割濱四千元 733125」2932.5兩	
09.12「割濱二千元 733125」1466.3兩	(發送者不明)
11.13「割濱3.6千元 7328」2638.1兩	10.10「357元 728」289.0兩
12.01「割濱2千元 7325」1465.0兩	12.28「匯豐票1248元725」903.6兩

④その他 計 1353.7兩 (1%)

03.01「代同豊泰交總署卅元 73」21.9兩	09.03「以莊支永安■」97.9兩
03.03「代元山交葛氏32.94元」23.9兩	09.04「以莊支安和泰錯入」72.9兩
05.28「■水■■■■■」32.8兩	11.11「代元山交葛氏」46.5兩
06.02「煙沽貨項匯水45寸」24.3兩	12.08「存票」853.9兩
06.10「錯附■一單 五月初一」149.6兩	12.30「16號票3千兩匯水」30.0兩

B：「付」方 計 115,399.5兩(100%)①商品發送 計 92,294.9兩 (80%)

01.11「元水」9302.1兩	07.07「八水」4366.6兩
02.10「二水」8558.8兩	08.01「九水」6753.3兩
03.07「三水」16182.6兩	08.19「十水」3792.3兩
04.05「四水」8514.0兩	09.06「十一水」3333.0兩
04.05「又四水」185.5兩	09.22「十二水」741.9兩
05.04「五水」7628.5兩	10.11「13水」1473.2兩
05.04「又五水」4523.8兩	11.04「14水」361.5兩
05.28「六水」6739.9兩	11.19「16水」613.5兩
06.19「七水」7693.6兩	12.08「17水」1531.0兩

②爲替拂出 計 4,704.6兩 (4%)

02.06「11號票」868.8兩	04.02「13號」72.4兩
03.04「12號」362.0兩	12.30「16號 庫平3千兩 申」3300.0兩
04.01「14號」101.4兩	

③代理支拂・買附 計 4,785.5兩 (4%)

(香港・安和泰)	08.24「安和泰代14水川費」3.5兩
06.08「安和泰代白鉛電」1.5兩	09.04「安和泰代以莊支永安」97.9兩
06.09「轉港參費」7.7兩	09.04「割支安和泰以莊手」72.9兩
06.12「安和泰代白鉛電」1.5兩	10.17「安和泰代串炮」11.0兩
06.28「安和泰代辦白鉛」1268.7兩	11.04「港代辦洋參」824.0兩
08.05「港代辦白鉛7月25」887.3兩	11.12「代轉港白參費」14.7兩
08.05「又〔港代辦白鉛〕 8月初2」871.7兩	

(廣州・永安泰)	(長崎・萬昌和)
11.21「配南支永安」14.4兩	07.10「萬昌和代白鉛川費45.31元72.25」33.9兩
12.30「永安代五水」120.4兩	07.25「萬昌和代鉛費19.61元73.25」14.4兩
12.30「永安代六水」18.5兩	
	(その他)
(大阪・祥隆號)	01.01「去年同記代西甘■149.2兩45水」114.0兩
03.01「祥隆代元水」223.9兩	02.11「同記代辦甘■71.54兩45水」74.7兩
05.20「祥隆代參費24.1元」17.6兩	03.02「李金廿元 732 李六手」14.6兩
	12.06「交榮記50元73」36.5兩
(横濱・福和號)	
12.25「福和代印票缺找54.86元73」40.0兩	
④仁川分號に振替	計 7,983.4兩 (7%)

02.10「仁川二水撥入」348.5兩	06.02「調入仁川」7581.4兩
02.10「二水漏抄」53.5兩	
⑤その他	計 5331.1兩 (5%)
(庚)12.30「綸卿交杰生家用」53.0兩	10.11「配南衣服一單」16.3兩
02.12「杰傑匯省」36.0兩	10.11「代唐紹儀合物川費」2.2兩
03.07「另賬」77.5兩	10.11「另賬一單」31.2兩
03.22「代元山交總署■」21.9兩	11.04「交物」11.1兩
05.04「另賬」92.8兩	11.19「另物」29.8兩
05.04「又〔另賬〕」127.2兩	12.05「另賬」12.2兩
06.12「英杰■泰友」22.3兩	12.08「另賬」25.9兩
06.19「另賬」35.1兩	12.30「電報費40.04元73」29.2兩
07.15「眼鏡補單」92.2兩	12.30「由申發電去港5.89元」4.3兩
07.25「杰生■娃 19.5元73」14.2兩	12.30「往來息」4762.9兩
08.24「眼鏡川費」2.0兩	〔破損〕「另藥川費」1.7兩
09.27「杰生交積厚堂田款」130.0兩	

出所)『進口各貨倉口單』(奎27581—1)所收の收支計算書(本文第4節(1)参照)。

註) 5件の收支計算書の内容を一括整理したものである。各項目はそれぞれ日附・事項(かぎ括弧「」)・金額を示している。日附や單位は原資料に従い、他への換算を行っていない。ただし金額は小數點以下第2位を四捨五入した。■は不明字、アラビア數字はもと蘇州碼字である。またA「付」方の項目中には、對應する賣上計算書の存在するものがある。その場合、對應する賣上計算書の各件番號(表5参照)をすみ括弧(【】)に入れて示した。

目も見られる⁴⁵⁾。このように同順泰と第三者の間で行われた取引の結果が、同泰號・同順泰間の收支計算書に計上されていることから、同順泰・同泰號とこ

(45) 同泰號以外の賣上計算書は28件現存するが、うち安和泰發のj04, j05を除く26件は收支計算書に對應項目がある。この2件は同順泰ではなく同泰號からの受託販賣に關する計算書であり(第2節(3)参照)、同泰號・同順泰間の收支計算書に現れないのは自然である。

れら第三の取引先の間には債権・債務の多角的な振替関係が存在していたと推測される⁴⁶⁾。

③**送金受取** ここに分類した各項目は、書簡その他の間接的根拠から、同泰號が第三の取引先から受けた送金を同順泰への債務に振り替えたものと推測される。例えば横濱の福和號では、譚傑生宛の癸巳（1892）十二月十九日附書簡にて「17日に貴函を拜讀し、第一國立銀行を通じて爲替送金された2,000元も併せて受領した。即日拂い出し、銀行の電信爲替1437.5兩（交換率0.71875）を同泰號に宛てて取組んだ」と述べている⁴⁷⁾。第一國立銀行ほかの日系銀行支店は、當時の朝鮮における唯一の近代的銀行であった⁴⁸⁾。福和號はそれらの横濱宛爲替を受け取り、香港上海銀行等の横濱支店で上海宛爲替に買い換える形で同順泰の上海送金を中継していたのである⁴⁹⁾。収支計算書上で「劃濱～元」の形を取る5項目は、こうした福和號からの送金受取で同順泰への債権を相殺したことを示していると見てよからう。

同様に「坂來10350元」は祥隆號（大阪）からの送金を指すと推測される⁵⁰⁾。さらに「匯豐票1248元」は香港上海銀行の爲替送金を指すと思われるが、當時の朝鮮に同行支店はなかったから、これも横濱などの取引先から取り組まれた可能性が高い。このように③の諸項目も②と同様に取引先間の多角決済を背景としたものといえることができる。

46) 表5備考欄に記したように祥隆號發の賣上計算書は宛先を同泰號とする。このことも同順泰・祥隆號と同泰號との振替関係を念頭に置けば説明できる。なお収支計算書の金額が上海規銀建であることは史料3からも明らかである。そして収支計算書上の金額と賣上計算書上の兩建金額が一致することは、それら賣上計算書も上海規銀建で作成されたことを示す。ただし賣上計算書が圓（元）建の場合、収支計算書ではそれを規銀建に換算する作業が行われているようである（例えば祥隆號に關する項目）。

47) 『同泰來信』奎27584-4, D02。原文「昨十七夕奉讀尊札、並由第一國銀行匯來貳千元、即日收到、代買銀行電票1437.5兩（71.875伸）、匯交同泰」。

48) 高嶋雅明『朝鮮における植民地金融史の研究』大原新生社、1978年ほか。

49) 横濱から上海への送金に香港上海銀行を利用していたことについては、譚玉階發譚傑生宛、十二月四日（年不詳）、『同泰來信』（奎27584-18）R33。

50) ただしこの項目には「收錯是仁號數」と注記があり、本來は仁川分號への収支計算書に計上されるべき項目であった。實際に「付」方では六月二日附で「調入仁川」として同額を計上することで相殺している（表8のB④）。

④**その他** その他の項目は手がかりが少なく、金額も小額のため検討を省略する。

(3) 「付」方項目の検討

ここでは表8 B欄所掲の「付」方各項目について検討する。

①**發送** A①欄の受託販賣に関する項目では「～水」の形で出荷番號を示していたが、「付」方にも同様の形を取る項目が見られ、同泰號から同順泰に發送した商品の出荷番號を指すと推測される。なお同泰號からの發送が同順泰の買附委託に基づいて行われていたことは第2節で見た通りである。辛卯年の收支計算書では第17便まで確認でき、第3節でみた甲午年(1894)とほぼ同水準、乙未年(1895)よりはやや少ない回数である。

②**爲替拂出** 「付」方には「～水」ではなく「～號」の形で番號を振られた項目もある。その番號は11號から16號まで(15號を除き)連続しており、B①欄に見える商品の出荷番號とは區別される。うち二月六日附の項目には「11號票」と記載があり、爲替・手形に関する項目と推測される。庚寅(1890)年の同泰號發書簡には同順泰の振出した「匯單」800元を拂出した旨の記述があり⁵¹⁾、また辛卯年(1891)の上海廣肇公所資料からは、同順泰仁川分號の振出した「仁字第貳百貳拾貳號匯票」を同泰號で拂出す際に起きた紛争を同公所が調停したことが知られる⁵²⁾。これらから同順泰が同泰號を名宛人とした上海向爲替を朝鮮で賣却していたこと、それらには發行元(漢城本號・仁川分號)ごとに「～號」の形で番號が附されていたことが確認できる。「付」方の「～號票」「～號」も漢城本號が振出した當該番號の爲替を同泰號で拂出したことに對應すると見てよいだろう⁵³⁾。

③**代理支拂・買附** 「代～」「交～」の形を取る24項目は、同順泰の委託を

51) 梁綸卿發譚傑生宛、庚寅年二月四日、『同泰來信』奎27584-18, R11。

52) 『廣肇公所集議簿』(上海市檔案館 Q118-12-139), 辛卯年十二月二九日條。

53) なお十二月三〇日附の「16號」には「庫平3千兩」とあり、同順泰と同泰號が公金の送金にも關與していたことが推測される。本稿では検討できなかったが、『清季中日韓關係史料』等の官側文書と同順泰資料を附き合わせることによって、朝鮮における清國の財政活動が同順泰をはじめとした華商の活動と深く結びついていたことが窺われる。この点については別稿を期したい。

受けて行った支拂・買附に關する項目だと考えられる。うち具體的に取引内容が判明するのは安和泰（香港）關連の項目に分類した八月五日附「港代辦白鉛」2項目（887.262兩／871.66兩）である⁵⁴⁾。これらの金額は、同日附の同泰號發文書によって同順泰に請求された「白鉛」2件の金額と一致する⁵⁵⁾。この文書によれば「白鉛」は香港から朝鮮に發送されたもので、その請求額は香港における商品自體の代金（882.852兩／867.33兩）に上海での手数料（「申叨用」，4.45兩／4.33兩）を加算したものである。このことから同泰號は、同順泰の委託を受けて安和泰に白鉛の買附注文を發し、安和泰からの請求額に自身の手數料を上乗せして同順泰に請求したと推測される。これは第3節(3)で見た安和泰に對する販賣委託の仲介とちょうど逆方向の取引といふことができる。

④**仁川分號に振替** 先述のように同泰號の收支計算書は漢城本號宛と仁川分號宛とが別個に作成されていた。④に分類した3項目は、漢城本號に對する勘定と仁川分號に對する勘定の間で振替が行われていたことを示す。具體的には二月一〇日附の2項目は仁川分號向けに發送した第2便（「二水」）の代金を何らかの理由で漢城本號宛の請求に振替えたものと考えられる。また六月二日附の1項目は、仁川分號との取引が誤って漢城本號に對する「收」方に計上されたのを相殺するため「付」方に計上されたものである（註50參照）。

⑤**その他** ①～④に當てはまらない項目である。うち8項目に現れる「另賬」については、甲午・乙未年に同泰號から發信された「另賬抄呈」「零賬抄呈」と題する10件の計算書（表2では「その他計算書」に分類）から内容が推測される。これらは貿易取引以外の雜支出の請求で、例えば甲午三月九日附の「零賬抄呈」では「傑生買墨」「格行信紙」など譚傑生の家計・經營内で消費されたと見られる物品が列記されている。收支計算書の「另賬」もその種の請求に屬するものであろう。「綸卿交杰〔傑〕生家用」「配南衣服一單」などの項目も同様と考えられる。なお「往來息」については、未清算殘高に對する利子や出資に對する利子など幾つかの可能性が考えられるが、未詳である。

54) 表では小數點以下2位を四捨五入。

55) 『進口各貨艙口單』奎27581-1所收。表2では「その他計算書」に含まれる。

(4) 收支構造の特徴

ここでは(3)(4)を踏まえて同順泰・同泰號間の收支構造の特徴を考察したい。まず期末の未清算残高を見ると、收支計算書（ア）の冒頭に記された庚寅年末の残高は同泰號側の16198.1兩の受取不足であり、同じく（オ）の末尾に記された辛卯年末の残高は同泰號側の27823.4兩の受取不足であった。また表8から辛卯年内の「收」方合計は103877.4兩、「付」方合計は115399.5兩であり、年間フローで見ても「付」方が「收」方を約11%上回っている⁵⁶⁾。この兩年にかけて兩者間の收支は同泰號側の受取不足で推移したといえる。

ただし兩商號間で直接に行われた貿易の較差はより大きく、「發送」（「收」方①）が「受託販賣」（「付」方①）を約27%上回っている。さらに「受託販賣」の大半は金銀地金が占めていたから、一般商品に限定すれば兩者間の貿易不均衡はより大きかった。當時の朝清貿易は清國側の壓倒的出超であり、同順泰・同泰號間の商品貿易もそのようなマクロ的動向を反映していたといえる。金銀地金の現送はこうした不均衡を壓縮するための對應だったのであり、さらに「收」方②③のような第三の取引先を介しての多角決済によって全體の收支をより均衡に近づける努力が拂われていたといえる。

こうした決済方法が必要とされた背景には朝鮮における近代的金融機關の未發達があった。先述のように當時の朝鮮では開港場の日系銀行支店が唯一の近代的銀行であり、その業務は日本人商人の對日貿易に基礎を置いていた。これらの店舗から上海への直接送金の途が開かれたのは、1893年5月に開設された横濱正金銀行上海支店との間にコルレス契約が締結された後のことである。しかもそれすら実際には、朝清間の貿易不均衡から上海送金の出合を取るのが困難であった⁵⁷⁾。こうした状況の中で同順泰・同泰號は、直接の銀行送金に依存しない決済方法を模索する必要があったのである。

⁵⁶⁾ 收支計算書（ア）と（オ）に表れる庚寅・辛卯兩年末の未清算残高の較差は、表8に示した年内收支項目の合計から算出した較差と異なる。しかし兩者のずれは1%以内に収まる。

⁵⁷⁾ 「明治二十六年中仁川港商況年報」『通商彙纂』第8號附録，1894年。

そのうち「はじめに」で述べた本稿の關心から注目されるのは、第三の取引先を媒介とした多角決済である。このような決済方法は、同順泰の對上海貿易が各地華商との多角的かつ持続的な取引關係を前提に成立していたことを具體的に示している。特に日本の開港場では朝鮮よりも早くから對清貿易金融が構築されており、日本華商の協力を得ることによってこれを日本人が構築した日朝間の貿易金融と接續させることができた。

では間に立つ取引先華商は、どのような意圖を持ってこうした多角決済に参加していたのだろうか。第2節で見た發送計算書の一部には、これら取引先華商による決済方法への要求が注記されている。ここでは安和泰（香港）發の乙未五月二日附け計算書（表3-b13）と、祥隆號（大阪）發の同年閏五月四日附け計算書（同e08）を見よう。いずれも永安泰（廣州）から同順泰に發送された「桂通」20箱（同c04）の積替に要した諸掛を請求したものである。

まず諸掛6.34元を計上する祥隆號發 e06の末尾には、「この費用は貴店の同泰號に對する「來往」に合算されたい〔該費祈入寶號同泰來往數合〕」との文言が見られる。「來往」を收支計算書と解釋すれば、祥隆號は上の請求金額を同泰號に對して支拂うよう同順泰に求めたといえる。一方で諸掛12.03元を計上する安和泰發 b13の末尾には「弊店の「來賬」に計上されたい〔祈登小號來賬〕」との注記があり、安和泰の場合はこの貸借を自號と同順泰の二者間で決済するよう求めたといえる。このように第三の取引先が同順泰との貸借を二者間で決済するか同泰號を含めた多角決済に持ち込むかは、おそらく自號と同泰號との收支狀況を勘案して一回ごと選擇していたものと考えられる。

當時の朝鮮開港場は東アジア域内交易の末端にあり、これら第三の取引先から見て同順泰が重要な取引先であった可能性は高くない。そうした場合、同順泰との貸借を二者間で決済するよりも、取引出合が集中する上海同泰號との貸借と相殺する方が合理的な場合も多かっただろう。換言すれば、そうした上海を中心とする多角的決済網が存在することを前提に、朝鮮のような新規開港場の華商とも相對的に安全に取引できたといえる。

お わ り に

本稿では開港直後の朝鮮で活動した華商同順泰の経営文書を取り上げ、その海外との取引関係について上海貿易を中心に検討した。同順泰の上海での取引先は、その出資者でもある同泰號であった。兩者間の直接の取引は、絹織物や綿織物などの輕工業製品を上海から輸出し、朝鮮からは主に金地金を現送するという形で行われた。このような朝鮮華商による對上海貿易のパターンは、日本人商人の活動に競合するものとして同時期の日本領事報告以來繰り返し指摘されてきた⁵⁸⁾。この點で本稿の検討結果は、通説を個別經營のレベルから補完するものといえる。

ただし注意されるのは、このような同順泰・同泰號間の取引が二者間で完結していたわけではなかったことである。同順泰は、經營者譚傑生の個人的な地縁・血縁関係と重なる形で、上海のみならず香港・廣州や煙臺、日本各地の開港場にも取引先を持っていた。こうした取引先間に構築された取引網が、金融や情報など様々な面で同順泰の對上海貿易を支えていたのである。また一面では、同順泰の各地との取引関係も上海の同泰號と結びつくことで安定を得ていた。同順泰が、後發に屬する朝鮮の開港場にあつて、廣域的な開港場間貿易に參入するためには、未成熟な近代的サービスを持続的・多角的な華商間の取引網の働きによって補完することが不可欠だったのである。

このように本稿では、朝鮮華商の活動を東アジアの開港場華商間に構築されたネットワークの平面上に位置づける作業を行った。朝鮮華商に獨自の特徴があるとすれば、それはこのようなネットワークの平面を念頭に置きつつ、改めて考えなければならない。この問題については、「はじめに」でも述べたように、先行研究が繰り返し強調してきた當該時期の特異な朝清関係のあり方に立ち戻ることによって初めて解答が得られることだろう⁵⁹⁾。本稿の検討から得ら

⁵⁸⁾ 本稿註2所掲の文獻參照。また金地金の現送については小林英夫「日本の金本位制移行と朝鮮」『旗田巍先生古稀記念朝鮮歴史論集』下、龍溪書舎、1979年も參照。

⁵⁹⁾ このことは同時期の國際政治の環境を扱った岡本隆司『屬國と自主のあいだ』（名古屋大學出版會、2004年）が、本稿註(3)に挙げた拙稿も引きながら批判的に指摘したところである（480頁、註22）。また本稿註53參照。

れた知見を念頭におきながら、この問題に改めて取組むことを今後の課題としたい。

(附記) 本稿は文部科学省平成16年度科学研究費補助金(課題番号16720168), 日本学術振興会委託研究費「帝国とネットワーク」(代表: 籠谷直人), 松下国際財団2003年度研究助成による成果の一部である。

**TRADE WITH SHANGHAI BY CHINESE MERCHANTS AFTER
THE OPENING OF KOREAN PORTS: VIEWED
THROUGH THE HISTORICAL RECORDS
OF THE TONGSHUNTAI**

ISHIKAWA Ryota

The trade with Shanghai conducted by Chinese merchants thrived after the opening of Korean ports in the 1880s. Tongshuntai 同順泰, which originated in southern Guangdong, was representative of Chinese trading companies in Seoul and Incheon at this time. The author has employed the financial records of the Tongshuntai kept by Seoul University to examine the function of its business network in the period from the 1880s to the mid 1890s, i.e., until the Sino-Japanese War, 1894-5. The results of the study are as follows. 1) Tongshuntai dealt with Chinese trading companies in Shanghai, Hong Kong, and the major trading ports in Japan. Most of which were formed by blood relatives or those who had come from the same area and who had maintained relationships with Tongshuntai for a relatively long period of time. 2) Among them, the most important trading partner was the Tongtaihao 同泰號 Shanghai, which supplied funds. The main trade with Tongtaihao was in the import of consumer goods such as silk and cotton textiles. 3) It was necessary for Tongshuntai to rely on the assistance of other trading partners in order to maintain trade with Tongtaihao. For example, Tongshuntai was in a state of general excess of imports from Tongtaihao, in addition to sending gold and silver bullion to Tongtaihao, it would often transfer their debt to a third party which also dealt with Tongtaihao, in its ledgers in order to balance its accounts. This type of operation was necessary because international financial services were insufficient in Korean trading ports at the time. The help of third parties was also necessary at times in maritime transport and communications for the same reason. In this way the example of Tongshuntai indicates that in the process of Korea's coming into contact with treaty ports of East Asia especially Shanghai, the immature modern service industry and the broadly based strong business network of Chinese traders functioned in a complementary manner.